

## 編集後記

今年は、暑い夏だった。39度を超えた時もある程で、例年より2-3度高い日が続き、ヒートアイランド現象を実感したし、地球温暖化にも注意が必要なことを痛感した。また、集中豪雨が大変な被害を及ぼしたし、台風が数多く上陸し、重ねて地震や火山噴火などもあった。

しかし、オリンピックでの日本選手の活躍には毎夜テレビの前で興奮させられ、寝不足が続いたが、選手と共に達成感と喜びに浸ることができた。

さて、日本消化器外科学会も中間法人としての法人格を取得して新しい一歩を歩み出したが、運営形態や税金など、戸惑うことも多い。営利団体ではなく、会員が費用を持ち寄って会員自身が消化器外科学のため、ひいては国民のために活動しているわけで、補助金が出てもよいくらいで税金をとるなど納得のいかないところである。法律の運用の仕方を考えていく必要がある。

医師の毎日は病苦との戦いであり、特に外科医のそれは激戦といえる。戦線の離脱者も出るし、負傷するもの、稀には戦死するものも出る。消化器外科医は“癌という強敵”を相手に奮闘しているが、相当に相手は手強い。善戦し、戦いの半数以上で勝利を収めてはいるものの、“癌の牙城”を攻め落とすまでには遠く及ばない。若い医師達は良く戦ってくれている。体力、能力の限界まで毎日毎日、昼夜なく、休日も返上して頑張ってくれている。小生も東海大学小隊の小隊長となって3年、消化器外科分隊長となって7年である。自分の時は判らなかつたが、若い隊員達の生活は大変であるし、むしろ異常であるとも思う今日この頃である。毎日毎日必死で働いている外科医の実態を国民に認知してもらう必要があるし、より良い環境で働けるように外科医の待遇改善を図らねばならない。マスコミも医療事故ばかりを取り上げるのでは、自らの首を絞める結果となりかねない。腕の良い外科医の育成は大変である。その上リスクの高い外科医になろうとする若者は激減している。21世紀まだまだ外科医は必要である。世間一般に外科医の必要性、重要性を認知してもらいその育成を図る機運を盛り上げていかなければならない。外科医の地位向上に努力したいと考えている。

(幕内 博康)